

## 2. 研究の詳細

プロジェクト名	「思わずやってみたくなる」異文化理解教育のための教材開発		
プロジェクト期間	平成25年4月1日～平成26年3月31日		
申請代表者 (所属講座等)	船越美穂 (幼児教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	江頭理江 (国際共生教育講座) 中島亨 (英語教育講座) 石上洋明 (九州大学テクニカルスタッフ) ベルガー有希子(ミュンヘン学校局) チャールズ・マルヴィッツ (英語教員)

### ①研究の目的

本研究の目的は、異文化理解教育の学び手である子どもたちが、興味を持ち楽しく学ぶことのできる上質な教材を開発することにある。自らと異なった文化に、子どもが自然と目を向けさせるためには、まずそれを促す自然な学びの教材が必要であり、その核となる要素はその教材が楽しいものであることだと考える。異質なものの、すなわち非日常なものに取り組みさせるためには、その違いをまずはとても楽しいと思わせることが重要なのであり、そのために非日常の場、非日常の取り組みの中で、その異なった文化に関することを「思わずやってみたくなる」という自然な学びを子どもたちに体験させることを、研究の目的とした。

### ②研究の内容

幼児と小学生に対して、自らと異なった文化に対する目を見開かせるためには、何よりそれらに対して違和感なく自然に受け入れる道筋を作ることが大切である。そのためにはまずどのような教材がふさわしいのかをしっかりと分析することが何より必要であると考えた。そのため、異文化理解教育の先進的実践国であるアメリカとドイツの教材についての文献収集と、日本に居住している子どもたちに対して行う教育を目指していることから、日本各地でのわらべ歌や手遊び歌、絵本、玩具などに調査を広げ、耳に残る音、印象的な絵やおもちゃなどを収集し、それらの分析を踏まえたうえで、どのようなタイプの教材が自然な学びを促進するかを研究した。

これらの資料収集、調査分析の結果、プロジェクト2年目の本年は、クマのパペットを用い、日本人、外国人のネイティブスピーカーとこのクマのパペットが英語でことばを交わしながら、「外国人と出会う」「畑仕事をする」「料理をする」をいう場面を設定して、英語でやりとりをするタイプのビデオ教材を作成した。今回のプロジェクトは、対象を幼児から小学生としているため、ひと対ひとで英語のことばを交わしながら、何かを作り上げていくよりも、動物のパペットを用いることで、幼児も無理なく興味を持ってこのビデオ教材を見ることができると考えた。また子ども自らが実行できそうな何かを行う過程を見せることで、ことばと行動が結びつき、またその作成の過程で用いる素材が、日本語では子どもでも知っているもの、入手しやすいもの、色がきれいなもの、また作成する活動が、子ども自身がやってみたくなること、学校でも家でも実施可能なことという諸点を考慮し、英語ということばのやり取りのみではなく、「出会う」「仕事をする」「料理を作る」ことを活動の中心とすることとした。

本プロジェクト2年に渡る研究内容としては以下ようになる。

**1年目** 1. 異文化理解教材の収集調査、分析を踏まえたうえで、子ども参加型のビデオ教材の作成を決定 2. 外国人のネイティブスピーカーとパペットが英語でことばを交わしながら、楽しく料理(サンドウィッチ)を作っていくというビデオ教材アイデアの決定 3. 教材作成を次年度行うために、24年度はどのようなパペットがふさわしいかについての分析を行い、使用するパペットのキャラクターを決定

パペットのキャラクター決定を慎重に行ったのは、子どもの興味を引くキャラクターがどのようなものであるか、ビデオの中で用いる英語のことばを話させるのにふさわしいのはどのようなキャラクターであるかということが重要であると考えたからである。1年目はこのビデオ教材の内容とパペットキャラクターの作成計画までを研究の到達点とした。

**2年目** 日本語話者であるクマのパペットが、英語のネイティブスピーカーと初めて出会い、畑仕事をともにし、料理をともに作るという場面の中で、英語でやり取りをしながら異文化に触れる体験を、子どもにまずはビデオを通して疑似体験させ、次回は子ども自らが、ビデオの中で見聞きしたことばを思わず使ってみながら、実際に

やってみたくなるという取り組みへとつなげることを目指したビデオ教材を作成した。

### ③研究の方法

#### 1年目

まず海外の文献収集と日本の歌、玩具等の収集を行った。文献収集調査、分析の結果を踏まえ、どのような教材が幼児と小学生にとって有効であるかについて、プロジェクトメンバー間での意見交換を重ね、また必要に応じて外国文化を研究領域としている学内外の研究者にもアドバイスを求めた。特にプロジェクト申請書に記載した科研(基盤研究C)「思わず言いたくなる英語のビデオ教材開発」のプロジェクトメンバーとは情報を交換し、共有できる部分も多いことから、具体的な教材作成についての有益な情報を得た。

これらのディスカッションと情報交換を経て、教材をビデオ型の教材とすること、動物のパペットを用いること、対象とする言語はこのプロジェクト全体の2カ年計画においてはまず英語とすること、内容は幼児を含むため平易なものとし、一つのビデオの長さも短めとすること、を決定した。

#### 2年目

日本人、英語のネイティブスピーカー、日本語話者であるクマのパペットがおもに英語でやりとりをしながら、「出あい」「仕事」「料理」をキートピックにして、パフォーマンスしてみせることにより、幼児から小学校低学年の子どもに異文化との出あいを疑似体験させ、「自らもやってみたくなる」という異文化への興味を誘発するタイプのビデオ教材を作成した。

### ④実施体制

プロジェクトメンバー5人が共同して資料収集、調査、ディスカッション、アイデア決定、場面策定、撮影、編集に参画した。資料収集については特に船越が、キャラクター作製、撮影、編集については特に石上が担当した。江頭と中島については、25年度、26年度前期に「小学校英語実践」という、小学校外国語活動について学ぶ授業を担当すること、また上に述べた科研プロジェクトに従事していることもあり、ビデオ教材の素材やその概要についてのアイデア収集を行った。マルヴィッツは英語チェックとともに英語話者として出演した。内容策定については全員が担当した。その他いずれもそれぞれの担当分野を持ちつつも、常に共同での作業を意識し、討論を重ねながらのプロジェクト遂行を目指すという形の実施体制を採った。

### ⑤実施計画に対する研究の進捗状況

24年度はプロジェクト2カ年計画の1年目であり、当初計画にある通り、海外の文献収集、調査、分析と教材スタイル決定とその内容審議、教材に使用するパペットキャラクター決定、原画作製までを実施した。次年度は実際にパペットを用い、外国人のネイティブスピーカーとパペットが英語でことばを交わしながら、料理(サンドウィッチなど)を作りながら、子どもの自然な興味を誘発するという、異文化理解教育のビデオ教材を作成する予定であった。

25年度は上で述べたように実際に異文化理解のためのビデオ教材を作成した。

### ⑥平成25年度実施による研究成果(2年間にわたる研究成果)

24年度に行った研究の成果は、まず25年度に江頭と中島が授業を担当している小学校外国語活動に関する科目「小学校英語実践」(Ⅶ期 選択 2単位 木曜3限)において、授業参加学生とともに具体的な教材作成を行うという授業実践につながった。この授業は、最初にNHK教育テレビなどで放送されてきた小学校外国語活動の番組を学生とともに視聴し、これらの分析を経て、学生グループによるビデオ教材作成を行うというシラバスのもと授業を行った。学生の学びの材料として、24年度我々がおこなった先行研究は学生にとって有益であった。学生は我々の研究内容も参考としつつも、学生が自ら考え教材内容を企画し、試作ビデオ教材の作製を行った。日本人学生と外国人学生が英語でことばを交わしながら日本の料理を作る(試作教材では肉じゃがを調理・ミックスジュースを作る)というもので、学生はいろいろなアイデアを取り込み、撮影や編集にも奮闘しながら、教材の改善を試みた。

また2年にわたるこのプロジェクト成果は、科研採択の「思わず言いたくなる英語のビデオ教材作成」プロジェクトにも反映させることができた。具体的な英語の音の収集をアメリカ等で行い、「思わず言いたくなる英語」の材料整理を経たうえで、具体的な教材作製に至ることを目的とした科研プロジェクトでは、本プロジェクトの外国人のネイティブスピーカーとパペットがかけあいでことばを交わす教材スタイルや「何かを作る」こと

で子どもに興味を持たせるというアイデアが、教材スタイルの策定に大いに効果的に働いた。—25年度は科研採択のプロジェクトにおいて、アメリカ・セントルイスを中心としての映像音声教材資料収集・教材作成を行ったが、これら映像・音声収集の方法について、本プロジェクトのアイデアが大いに生かされた。

また引き続き、中島・江頭で担当している26年度前期授業科目「小学校英語実践」(Ⅶ期 選択 2単位 木曜3限)においても、新たな外国語活動のための教材を学生とともに作成する予定で、ここでも本プロジェクト内容は生かされることとなる。

#### ⑦今後の予想される成果

今後このプロジェクトで作成したビデオ教材については、幼稚園、小学校等での授業で実際に用いて、子どもの反応や担当教員に意見をいただきながら、内容改善を試みる必要があると考えている。

外国語活動の学びのためのビデオ教材は、最近いろいろと公開されてきてはいるが、「自分もやってみたい」「言ってみよう」という子どもの自然な気持ちを誘発する類の上質な教材は、多くない。その意味において、本プロジェクトが志向しているビデオ教材は、何より子どもの自主性を重んじ、自然な学びを促す意味において、異文化理解教育においてまだまだ不足している教材支援の観点からとても有効なものであると考えている。

先行研究を踏まえ、資料収集、分析、理論展開、結論に至るタイプの論文による研究業績の発表のみならず、本プロジェクトではなにより、それらの研究内容を踏まえ、実際に教材を作製し、幼稚園、保育園、小学校でこの教材を用いて保育・授業を行い、問題点、改善点を見出しながら、再度教材そのものに改善を加えながら、より完成した教材へと昇華させていくプロセスも重視している。今後このビデオ教材を、学内外で学会も含めて公表しながら、研究成果の公表に努めていく予定である。

#### ⑧研究の今後の展望

今回の教材スタイルでは、日本人、外国人のネイティブスピーカーとクマのパペットが何かに取り組むというスタイルを採っているが、子どもがこの内容に興味を持ち、自らやってみたいと思ったとき、それを園や学校で実際に実施する事ができるのであろうかということが若干問題であると考えている。「やってみたい」「英語を使ってみよう」という思いをどのように実際に実現させるのか、実に重要な問題である。従来の異文化理解教材が、知識の詰め込み型であった反省を踏まえ、今回の教材は子どもの自発的学び誘発型を目指したわけだが、子どもにとっての学びの到達点をどこに定めるのかは難しい問題であると感じている。

教材が、子どもの学びをアシストする重要な位置を占めるという意味において、教材を用いた保育・授業を子どもの次の学びにいかにつなげていくか、についても今後考えていかなければならないであろう。たとえば、子どもの「やってみたい」という思いを比較的簡単に実現するためには、料理ではなく、何かを制作するというのも可能ではないだろうか。しかしながら、この点については、まずは本アイデアで教材を作成し、子どもの反応や担当教員からの意見を踏まえたのちでないと、考察に取り掛かれないであろう。

また本プロジェクトで作成する教材が対象とする子どもの年齢であるが、まずは幼児と小学校低学年と考えている。これは自然な学びを自然な形で誘発するには、これまで異文化理解教育にあまり触れたことのない年齢の子どもの方が、反応が出やすいのではないかと考えたこと、合わせて異文化理解教育が幼小連携・接続をスムーズに行わせる、一つのキーアイテムになるのではないかと考えたからである。しかしながら、この対象年齢と幼小連携・接続の点についても、完成した教材への子どもの反応等を見ながら考察を重ねていく予定である。

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。

○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。

○研究テーマが2ヶ年計画の場合は、本報告書を平成25年度審査会の判断材料の一つといたします。